

D 5

老親同居とその条件 その2-同居生活実態について-  
目白学園女子短大 ○中島明子、竹内佐由里

目的 高齢化社会の到来を前にして、老人扶養・老人福祉問題に大きな関心が集められてきたが、この中で老人扶養の基本的対応として強調されているのが、日本型福祉論にみられる「子による老人扶養(同居)」である。その理由としては①我国では欧米に比べて同居率が高い事、②老人の精神的安定が保たれている。しかし老親同居<三世帯世帯>については、世代間交流にとまらぬ様な積極的役割があるとはいえず、現実には、老親自体又子世帯の主体的条件及び地域・住宅条件等が一定満足できるものでなければ、老親にとり、子世帯にとりても生活上の負担や苦痛は大きくなる。本報告では同居という空間的規定条件内で展開される共同生活実態を中心にまとめている。(老親同居世帯の基本属性及び住宅・居住実態については第29回住宅問題研究会81年2月に発表済)

方法 都市部として東京都内の私立中学・高校を、農村部として群馬県の公立高校を選び、老親同居世帯の子世帯の母(生徒の母親)に調査票を配布し、回収郵送とした。期間は80年7月で、有効回収票308(回収率65%)である。

結果 老親同居世帯の生活全般を大きく規定するのは、同居形態-父子同居か母子同居か-で、地域的にみると、農村部が母子同居に、都市部が父子同居に近い性格をもち、同居に於ては母子同居の方が評価は高い。主たる生活の実務分担では、特に都市部で夫婦の負担が大きく、留守番に対する評価は高いものの、家事軽減の評価は低い。又妻がうめて困難と感じている事は、生活のランボルギーニの差、価値観の相違で、老親が80代以上の世帯の6割は「困る」としている。